S class

創作絵本・世代間交流

「人生１００年、いや１２０年
～自分らしく、その人らしく～」

指導担当　森永 牧子

「人生 100 年。いや、120 年！！」

～自分らしく、その人らしく～

専攻科福祉専攻　Ｓクラス
担任：森永牧子

テーマ

2007 年に超高齢社会に突入した日本では、平均寿命が男女ともに 80 歳を超え（男性 81.4 歳、女性 87.3 歳）高齢化率も 28.1％となり３人に一人が 65 歳以上となりました。また、ある海外の研究では、2007 年に日本で生まれた子供の半数が 107 歳より長く生きると推計されており、日本は健康寿命が世界一の長寿社会を迎え、「人生 100 年時代」がやってくると予想されています。

「人生 100 年時代」に、高齢者から若者も全ての国民に活躍の場があり、全ての人が元気に活躍し続けることが社会、安心して暮らすことができる社会のために、制度や考え方など、医療・福祉・教育・経済・働き方など様々な取り組みが始まっています。国が行う政策だけでなく、私たちが自ら積極的に「人生 100 年時代」における自分の人生を考えていく必要があります。

現在 20 歳代の私たちは、人生をさらに長くなると考え、「人生 120 年」を掲げ、長く生きるだけでなく、楽しく、充実した人生を送るために、「自分らしく、その人らしく生きること」について考え「絵本」と「音」で表現しました。

内容

①「介護が必要になっても自分らしく、その人らしく～創作絵本～」
- 介護保険について、子どもたちにも分かりやすいよう身近な動物たちが登場する絵本を作り、発表する。

②「誰でも楽しめる音の世界～世代間交流～」
- 専攻科学生による三味線の演奏（曲名：涙そうそう）
- ひまわり会の皆さんと、専攻科学生によるスコップ三味線の演奏（曲名：千恵っこよされ）

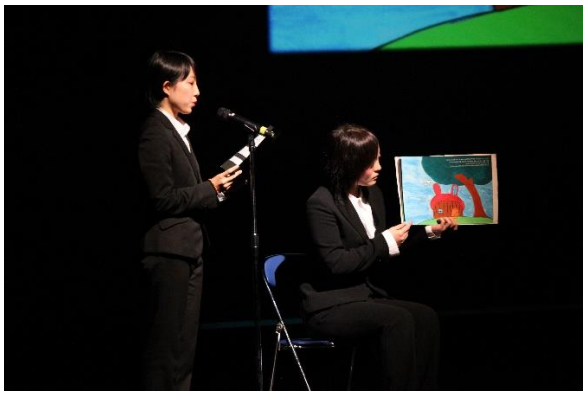
③健康体操を行う。（曲名：365 歩のマーチ）

創作絵本「しあわせなうさぎ」

目的：介護が必要になっても、自分らしく、その人らしく生きるための制度として
　　介護保険があることを伝え、絵本で表現する。

> 介護保険制度とは…
> ・介護を必要とする高齢者を支える制度で、2000 年に創設された。40 歳から介護保険料を負担し、老後の不安原因である介護を社会全体で支える。
> ・被保険者は、65 歳以上の方（第 1 号被保険者）と、40 歳から 64 歳までの医療保険加入者（第 2 号被保険者）に分けられる。第 1 号被保険者は、原因を問わずに要介護認定または、要支援認定を受けたときに、介護サービスを受けることが出来る。第 2 号被保険者は、加齢に伴う疾病（特定疾病）が原因で要介護（要支援）認定を受けたときに介護サービスを受けることが出来る。（厚生労働省）

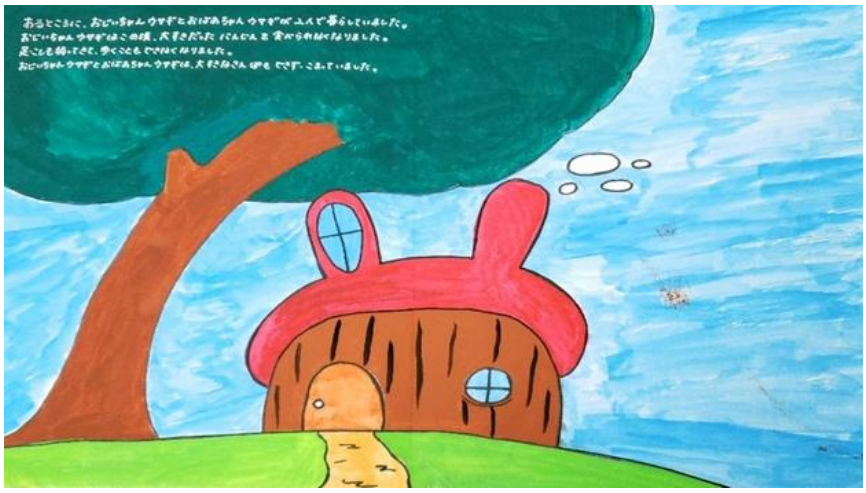
対象者：年中～小学低学年
対象理由：子ども達にも「介護」について知ってほしい。
　　高齢者になって困ったときに助けてもらえる仕組みがあることを知ってほしい。
　　子ども（年中児）が理解できれば、どの世代も方にも理解できるのではないか。
発表方法：舞台上で創作絵本「しあわせなうさぎ」を読み聞かせする。
　　絵は、スライドショーで、ホリゾント幕に映す。
作成方法：絵具
読み：Y　・絵本持ち：S　・スライド：K　・ナレーション：S
読み方・作成指導：吉柳先生



創作絵本～しあわせなうさぎ～

表紙

しあわせなうさぎ

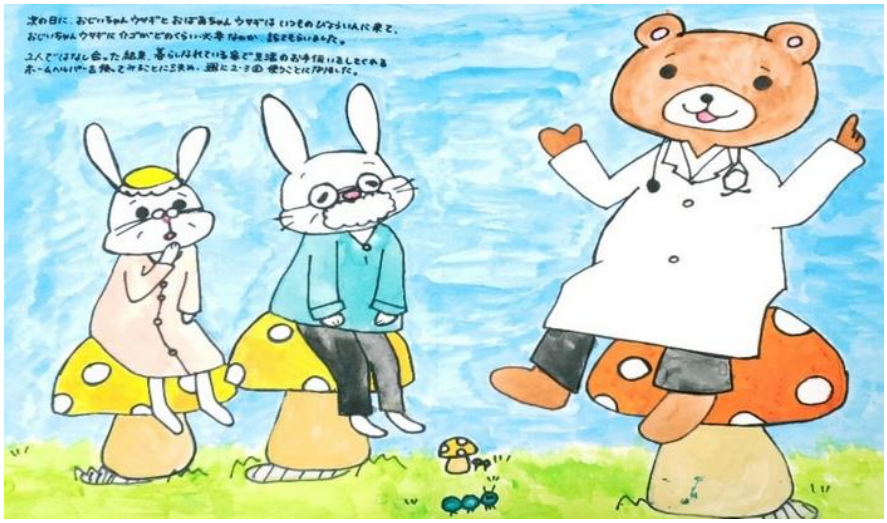


あるところに、おじいちゃんウサギとおばあちゃんウサギが二人で住んでいました。おじいちゃんウサギはこの頃、大好きだったニンジンを食べられなくなり、足・腰も弱ってきて、歩くこともできなくなりました。

ある日、おばあちゃんウサギは近所のネコさんとお話をしました。
おばあちゃんウサギは、「最近、おじいちゃんウサギの様子が変なのよ」とネコさんに相談をしてみました。すると、ネコさんは「市役所に行くとわかるかもしれないよ」と教えてくれ、次の日に一緒に行ってみることにしました。

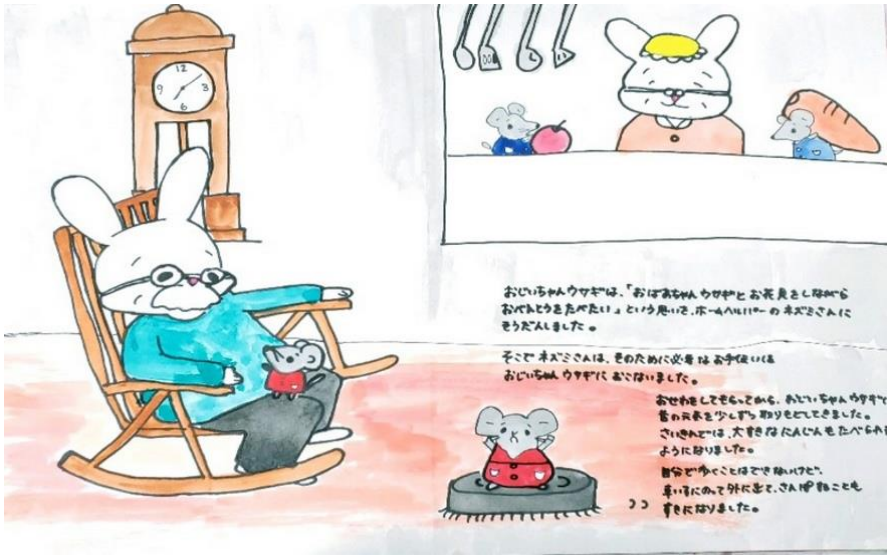
次の日、おばあちゃんウサギはネコさんと市役所にやって来ました。
市役所の犬さんにおじいちゃんウサギのことで困っていることを伝えると、「年を取って働けなくなったり、自分で生活できなくなった時に助けてもらえる仕組みがあるから、使ってみませんか？」と優しく教えてもらいました。
そして、その仕組みのことを介護保険って呼ぶことも教えてくれました。

家に帰り、おじいちゃんウサギに市役所で教えてもらった、介護保険のことを伝えました。おじいちゃんウサギは、「介護保険ってものがあるんだなぁ」と言いました。
二人は話し合って介護保険を使ってみることにしました。



次の日、おばあちゃんウサギとおじいちゃんウサギはいつもの病院に来て、おじいちゃんウサギの介護がどのくらい必要なのか診てもらいました。

二人で話し合った結果、暮らし慣れている家で、生活のお手伝いをしてくれるホームヘルパーさんに、来てもらうことにしました。週に 2 回から 3 回来てもらいます。



おじいちゃんウサギは、「おばあちゃんウサギと、お花見をしながらお弁当を食べたいなぁ…」という思いを、ホームヘルパーのネズミさんに相談しました。
そこで、ホームヘルパーのネズミさんは、おじいちゃんウサギに必要なお手伝いをしました。

お世話をしてもらってから、おじいちゃんウサギは元気を少しずつ取り戻してきました。
最近では、大好きなニンジンもまた、食べられるようになりました。
自分で歩くことはできないけれど、車いすに乗って散歩することも好きになりました。

ある日、おじいちゃんウサギの夢でもあった、おばあちゃんウサギとお花見をしながら、お弁当を食べるという日が来ました。おじいちゃんウサギとおばあちゃんウサギは笑顔いっぱい過ごしました。

記念にとった二人の写真からは、すごく幸せそうな気持ちが伝わってきました。

この村は、みんなで支えあって、おじいちゃんおばあちゃんになっても安心して暮らせる、笑顔いっぱいの村です。

背表紙

誰でも楽しめる音の世界～世代間交流～

☆専攻科学生（M）による三味線の演奏

曲名：「涙そうそう」／BEGIN
作詞：森山良子
作曲：森山良子

☆専攻科学生（5名）とひまわりの会の方（5名）によるスコップ三味線の演奏

曲名：「千恵っ子よされ」/岸千恵子
作詞：志賀大介
作曲：中山博

スコップ三味線とは…

１９８５年頃、青森県在住の館岡屏風山が考案したものであり、店たまたまあったスコップと栓抜きで弾き真似をしたことが始まり。その後、誰でも始められるものとして全国に広まっていった。また、２００７年には、「第一回スコップ三味線世界大会」も開催されており、第２回では芸能人である月亭方正さんも出場しており３位に入賞している。

スコップ三味線は、スコップと栓抜きを用いて音楽に合わせて津軽三味線の真似をして演奏するもの。津軽三味線の叩きつける音とスコップを叩く音がマッチして、本当に弾いている感覚を演奏者、聴衆ともに味わうことができる。楽器演奏の技術を必要とせず、誰でも行うことができるが、本当に弾いているように見せるには、熟練のワザを必要とする。

ひまわり会とは…

ひまわり会はスコップ三味線の活動をしている久留米市三潴町のボランティアの団体である。65歳以上の方を中心に活動している。

日頃から、スコップ三味線や踊りなどを老人ホームの敬老会等の地域のイベントなどで披露している。演奏するときは顔に被り物をして変装をしたり、衣装を工夫したりして会場を盛り上げている。

今回の発表では、スコップ三味線の指導と健康体操も教えていただいた。

〇スコップ三味線を発表に選んだ理由

・三味線は日本伝統の楽器だが、演奏するには技術が必要である。しかし、スコップ三味線の存在を知り、誰でも手軽に演奏が出来るということから、高齢者の余暇の時間に活かせたり、地域交流もつながったりと、年齢関係なく出来るものではないかと思ったからである。

〇スコップ三味線の作り方と演奏法

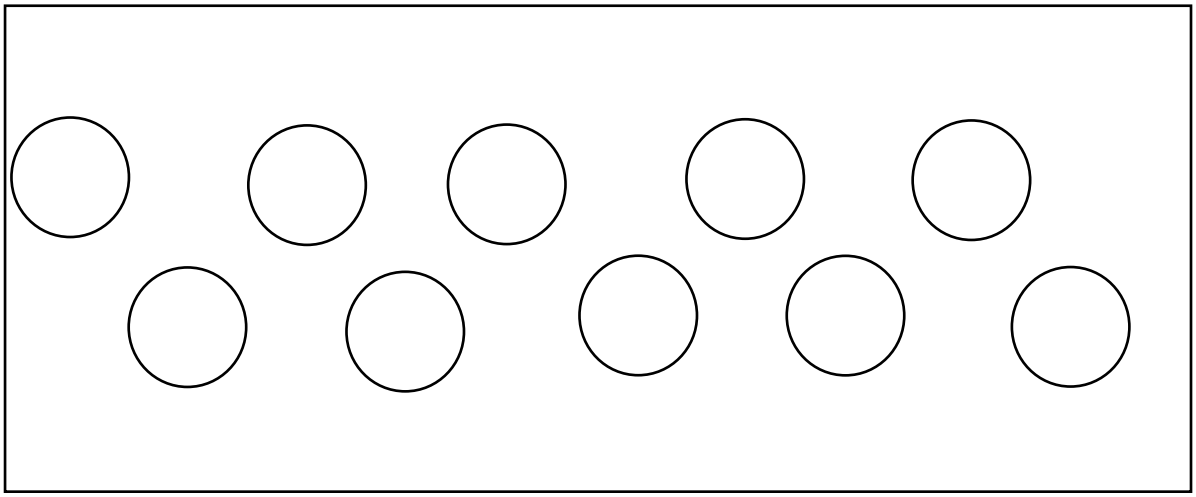
・作り方は、スコップに紐を、構えやすい長さでつけるだけである。演奏に使用するものは大きめの栓抜きが主に使われている。そして、今回
演奏するにあたって準備したものがタオルである。スコップの先を太ももに乗せるため、痛みがないようにクッション代わりにした。

・演奏法は、座った状態。左手はスコップの柄の部分をつかみ、曲の高低に合わせて上下させる。特に、津軽三味線独特の音程を下から上に上げる（ポルタメント）奏法を取り入れることにより、よりリアルな奏法になる。また、時々、糸巻き（実際には無い）を調節する動作を入れるのが、ポイントとなっている。右手は栓抜きを持ち、音に合わせてスコップを叩く。普通に叩く１つ打ちのほか、スコップの凹み部分を使うことにより２つ打ちを行うことができる。これらを混ぜることにより、より津軽三味線らしさを演出することができる。さらに、大きめの栓抜きを使うことにより、柄の部分でも叩くことができ、この場合には、より複雑なリズムを演奏することができる。

○発表

三味線の演奏時、明かりは演奏者１人にスポットライトを当てる。その席以外で、スコップ三味線の演奏者が座って待機。三味線演奏終了後、三味線演奏者とスコップ三味線の残り一人の演奏者と交代して、スコップ三味線の説明をしてから演奏。曲「千恵っ子よされ」に合わせてかけ声もしながら演奏する。

※演奏隊形

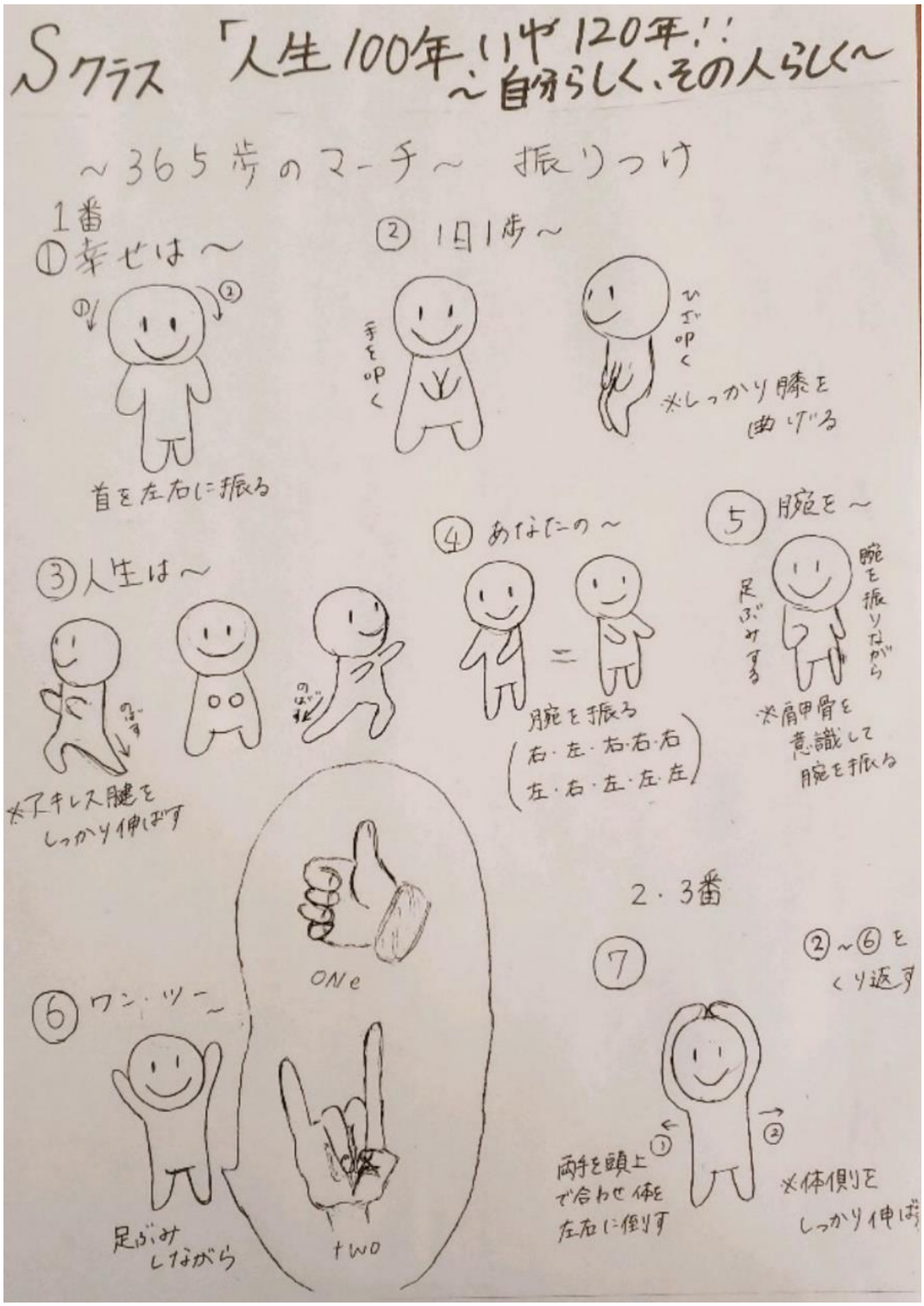


健康体操　～365 歩のマーチ～

健康体操とは

健康づくりのための体操。体力づくりの 3 大要素といわれる持久力・筋力・柔軟性の向上を柱に構成されています。

ただ身体を動かすだけでなく、音楽に合わせたり、仲間と一緒に体操するなど無理せず楽しく行うことが大切です。



遊びと表現発表会を振り返って

今回私たち専攻科は、２つのグループに分かれて発表を行った。

私たちは～誰でも楽しめる音の世界～世代間交流というものをテーマにし、活動を行った。最初は何を行うか悩んでいたが、調べていくうちに「スコップ三味線」というものに出会った。　スコップ三味線はスコップに紐を付け三味線に見立て、栓抜きで叩くという簡易的で楽器演奏の技術を必要とせずに行うことが出来るものということも知った。私たちは「スコップ三味線」を発表の題材にしたいと考えた。　このように思った理由が、地域の方で「スコップ三味線」を行っているところがあるということを聞いた。　その地域の方々と交流を行い、一緒に発表を行いたいと強く思い、また、スコップ三味線は施設などでの余暇の充実や介護者、利用者との信頼関係、コミュニケーションツールにもなると考えた。　そのことを地域の方々にお話しすると、快く承諾をして頂き、発表を行うこととなった。

地域の方々と交流を行いその方々の演奏を聞いてみると、出来るかどうか不安ではあったが、日々の練習や地域の方々の熱心な指導の素、演奏ができるようになった。　他にもスコップ三味線の練習を行っていくうちに、健康に関する話題になり、地域の方々が行っているという「三百六十五歩のマーチ」に合わせた健康体操を、創作絵本のチームと一緒に行うこととなった。　健康体操は、座ったままの方々でも行う事が出来る体操であったため、解説等をふまえながら体操を行うことで会場にいる方々にみて理解してもらうだけではなく、この体操を行うことにどういった意味があることなのかを知ってもらう事が出来ると考えたからだ。

私は今回の練習や地域交流を行い、様々な人とコミュニケーションをとることで、自分が今まで考え就くことも出来なかった多くのことを学ぶ事が出来ると実感する事が出来た。また、介護保険の創作絵本を見て、保険制度や支援の方法を学ぶことで、利用者の方々の日々の充実にもつながっていくということも学ぶ事が出来た。　(I)

遊びと表現発表会では、スコップ三味線と体操を担当した。スコップ三味線を弾く上で地域の方から、スコップの持ち方や三味線に似せるための手の動きなど様々なアドバイスをいただいた。本番直前まで苦戦していたが、練習をしたことにより納得のいく演奏ができた。また地域の方と演奏をしている中で、手拍子の音が聞こえてきた。スコップ三味線をたたく音に合わせて手拍子をしている人がいるのを見つけ、そういった楽しみ方もあるということを知ることができた。もし施設でレクリエーションとして行ってみるとしても、スコップを持って演奏をすることが難しい方もいる。しかし、手拍子だと演奏を聴きながら参加することができ、レクリエーションとして楽しめるのではないかと思った。

体操を行う上で、始めなにも意識せずに行っていた。しかし、体操であるため１つ１つ

の動きで、どこを意識しなければならないかアドバイスを受けた。アドバイスを意識して行ってみると、どこに効いているか実感した。また、この体操は体の運動だけでなく、頭の運動も取り入れてあるため、認知症予防にも効果的ではないかと考えた。毎日のラジオ体操の代わりにこの体操を入れても気分の転換に繋がり、利用者の方も楽しんで参加してもらえるのではないかと思った。さらに、体操の中で曲に合わせて、親指、きつねをする場面がある。この体操を間違えないでできた時、達成感をあたえることができるのではないかと感じた。発表の中でも、友達同士で競い合っている様子も見られたため、今回の体操を楽しんでもらえたように思えた。

今回の遊びと表現発表会を通して、見せる相手に楽しんでもらうためにどんな表現をしたらいいか、また参加の仕方は様々だということを学んだ。実際に自分が働く場所には、半身まひの方や車いすの方、気分にむらがある方と様々な人がいる。１人１人楽しんで参加してもらうためにどんな方法があるか考えて実践していくことが大切だと思った。(I)

今回の遊びと表現発表会では、スコップ三味線を通して世代間交流を行った。私は、スコップ三味線というものを今回の発表をするにあたり初めて知った。三味線を弾くには技術を必要とするが、スコップ三味線は簡単で私でも楽しく三味線の気分を味わうことができた。地域の方にたたき方の指導を行ってもらい、一緒に練習していく中で地域の方とのつながりの大切さを学ぶことができた。地域にどのような方が住んでいらっしゃるのか、どんな活動をされているのかを知ることにより、地域の人々との交流や協力体制ができるのではないかと思った。最近では、地域住民同士の関係が希薄になっている現状にある。今回私たちの発表に協力してくださったひまわり会の皆さんのように、地域で活動されている方と地域住民が交流できるようになると地域住民同士の関係を築くことができるのではないかと思った。スコップ三味線は高齢者でも子供でも楽しむことができるため、世代間交流にはとてもいいものだと思った。今までスコップ三味線というものを知らなかったため、初めて名前を聞いた時は、楽しくないだろうと思った。スコップを叩くことの何が楽しいのかわからなかった。実際に、ひまわり会の方々の演奏を見てとても迫力があり、自分も楽しめると思った。叩いてみるとなかなかいい音が出ず、ひまわり会の方に栓抜きの持ち方､叩き方を教わった｡授業や実習以外で地域の方とかかわることがなかったため、私にとっていい経験となった。ひまわり会の方はスコップ三味線という共通の楽しみをもち活動されていた｡地域で同じことに興味を持っていたりする方に､交流する機会を設け、地域住民同士が良い関係を築いていけるような支援ができたらいいなと思った。今回は、子供たちとの交流ができなかったが、機会があるときには子供たちとも交流を行い、世代間交流の良さを子供たちにも伝えていきたいと思った。大変なこともあったが、みんなで協力して発表できてよかったと思う。(K)

2年前の遊びと表現では、「保育」としての発表をしてきました。今回は、専攻科ということもあり、「子ども」「高齢者」を対象にして発表をしました。

私は、「介護保険」をテーマで子どもにも分かるように絵本を通して発表を考えました。どのような内容にするのか、ストーリーを考えていったり、子どもにどうのように説明・言葉の表現をすれば伝わるのかを考えながら絵本を作ることはとても難しかったです。表現の仕方で伝わらない部分もあるので、子ども目線で考えてストーリーを構成していくのは難しく、自分目線や大人目線では無かったので、発表の際の表現の工夫は話し合って決めるなどと完成していくまでに時間が掛かりました。地域の方と交流を通して発表もしました。世代関係なく楽しめる体操やスコップ三味線を行ってみて、楽しさを感じることができました。世代関係なく何か1つの事をすることで表現の仕方も違うし、楽しさも倍になることを実感することができました。

今回の遊びと表現の全体を通して、自分たち以外のクラスの発表、子ども達の発表を見て、一人一人、クラスの表現の仕方がありました。同じような発表の仕方がなく学ぶ部分が多くありました。園児の発表の時、同じ題で身体表現をしているのに、一人一人身体の使い方だったりと表現が違いました。その子の個性が発揮されていると感じました。表現の仕方を全員固定するのではなく、表現の仕方の個性を大事にすることが大事であるということを学ぶことができました。また、各クラスの発表の中でもただ発表をするのではなく、開場の生徒や子ども達と一緒に参加する工夫してたりしていました。そのような工夫をすることで発表を見ている方でも楽しめることもできます。発表の中で少しでも工夫することで楽しめることを学ぶことができました。それぞれのクラスで発表の仕方がある中で多くの事、工夫すること、どのように表現するかということを学ぶことができました。（K）

遊びと表現を振り返って、３回目の遊びと表現は幼教の時と全然違った。
私は、介護保険に関する創作絵本を担当した。どういう内容で誰を対象に書くのかみんなで沢山考えた。作るのはとても時間を掛けたけど発表はあっという間に終わりいい思い出になった。

最初は何しようかとても迷ったりしていたけど、自分たちの学びを皆に少しでも伝える事が出来てよかったと思う。専攻科でいい思い出が出来てよかった。(S)

今年の遊びと表現発表会では、「人生１００年、いや１２０年～自分らしく、その人らしく～」というテーマのもと、創作絵本と世代間交流の発表をした。私は、介護保険のことを伝えるための、創作絵本を作るグループであった。「しあわせなうさぎ」という創作絵本を作っていく中で、伝えたいことはなにか、どのような構成にするのかを考えた。絵本の対象年齢を幼稚園から小学校低学年までに設定したため、どう伝えれば伝わりやすいのかが難しいところであった。イメージがしやすいように身近な動物を登場させてみたり、簡

単な言い方で言ってみたりなど工夫をした。この絵本を作っていくことで、自分たちの勉強にもつながり、曖昧に記憶していたものの再確認ができたような気がする。今まで子どもの将来の夢の中に、介護福祉士という職業を聞いたことがなく、それは、身近な人に介護という仕事に関わっている人が少ないからではないだろうかと考えた。今回の発表は子どもたちにも見てもらえたと思うので、少しでもこんな仕事があるのだなと知ってもらえていたら嬉しい。子ども以外でも、介護保険について知らなかった人が、介護保険や福祉に興味を持ってくれるいい機会になってくれたらと思った。絵本を作りながら、絵本を制作することは思っていたよりも難しいなと感じた。5 人で創作絵本の制作をして、台本を作る、絵を描く、ステージで発表する、など、みんなで協力しながら作り上げていけたのではないかと思う。なかなか完成せずに大変だったけど、発表ではうまく見せることができたんじゃないかなと思った。私は最初の発表説明をして、「介護保険制度」のところを噛んでしまったのが、少し残念だった。みんなで絵本を作って発表して、終わった今考えると楽しかったと思う。もう 1 つの世代間交流のグループの発表も、見ていてとても楽しそうだったし、地域の方との交流も出来ていて、いい発表だったと感じた。健康体操は、みんなで楽しくすることができた。クラスのみんなで 1 つのステージを作り上げて、いい思い出になった。(S)

遊びと表現発表会を通して、様々な人と出会い、多くの事を学び、多くの体験ができた。私は、スコップ三味線のグループに入った。スコップ三味線をすると決まったとき、その時に、初めてスコップ三味線の存在を知った。初めてのひまわり会の方々と練習の時、不安と緊張でいっぱいだったが、ひまわり会の方々は笑顔で話しかけ、丁寧に教えて下さった。時間が経つにつれて、緊張も緩まり練習に集中できるようになった。本番でも、ひまわり会の方々が一緒にステージを盛り上げて下さり発表がとてもいいものにできた。
難しかったことは、「は！」の掛け声がなかなか揃わなかったことだ。何回やってみてもズレてしまい悩んだ。しかし、みんなで音源を聞いて、「これくらいではないか」など互いに意見を出し合い、タイミングをつかんでいったことで、本番ではしっかりと合わせることができた。このことから、協力する事の大切さを学んだ。ステージを作り上げていくとき、絵本のグループの人とも互いに意見を出し合い、どういう順番にしたら円滑に進むかマイクなどを誰が持っていくかなど、それぞれの役割を決めていった。そうすることで、ステージ上で混雑せずにサクサクと動くことができた。意見を出し合うことの重要さを知った。すべて順調にいったとは言えないが、最終的に、とても良いステージを一緒に作り上げていくことができた。テーマであった、世代間交流も図ることができた。
支援者として学んだことは、ひまわり会との交流を通して、地域で交流を図ることは大切だと学んだ。ひまわり会の方々は、皆さんとても生き生きしていた。私たちが来た時、とても喜んで迎え入れてくれた。交流を図っていく中で、様々な話やスコップ三味線の叩き方や持ち方のコツを教えて下さった。このように、地域の方がもつ知識などを私たちのような若い世代に教えていくことは、技術を伝える事にもなる。地域の方も教えるやりがいができると思う。このことから、地域交流は大切だと学んだ。(S)

今回、S クラスの遊びと表現係として発表について考えました。私は、始めの方は進行役として努めていましたが、クラスの考えを聞く態勢を整えただけで、全員が意見を言いづらい環境の中進めてしまいました。その中でも発言をしてくれる人がいたり、私にアドバイスをくれた人がいたり様々な応援をしてくれました。しかし、その後も私が物事などをまとめられなかったり、感じ方が微妙に違っていたりと、全員が発表について意欲的に考えられる場を設けることは出来ていなかったように思えます。考えすぎだとは思いましたが、自分に足りなかったことは、みんなが楽しく、そして頑張りたいと思える環境作り、それに加えて自分が意見をしっかり持って引っ張っていくリーダーシップだと感じました。
発表が二部構成と決まってからは、私はスコップ三味線グループに主に関わっていきました。地域でスコップ三味線の活動をしている「ひまわり会」の方々と交流をして練習をしました。スコップ三味線は個人的な印象としては「楽しく自由に弾く」といったイメージを持っていましたが、発表の指導をしてくださる先生から、それを踏まえて三味線っぽく演奏をし、披露をすることの指導を受けて、ただスコップを叩くだけじゃない「スコップ三味線の演奏」をすることが出来ました。
また、スコップ三味線の練習と同時進行で行われていた、絵本の内容を考えている絵本組の方にも顔を出し、少しでしたが意見を言っていきました。遊びと表現の係なので、どのように進んでいるのか知ろうと思ったからです。絵本組は、1 から考える難しい作業でしたが、着々と進めていき、介護保険を利用したサービスを絵本として分かりやすくまとめました。その過程は、全員意欲的で気を張り詰めすぎずに作業をしていたので、絵本組の団結力を感じさせました。
発表では、私が観客に伝える説明を間違えてしまいましたが、無事に終わったと思います。発表中、観客の方々は読み聞かせの時はメモをとってくれてる人が多く、内容に耳を傾け続けてくれ、スコップ三味線では首を軽く動かしてノッてくれたり、珍しそうにみてくれたりと、発表して良かったと思える反応でした。発表の最後に行った健康体操は、観客のほとんどの方がしてくれました。少しでも介護に興味を持ってくれたら嬉しいと思います。
将来、私は介護福祉士ではなく保育の道を考えていますが、今回のように介護の知識が保育で活かせていけるのではと思い、頑張りたいと思います。(T)

今回専攻科福祉専攻として、遊びと表現発表会に参加した。企画の段階で、２グループに分かれたが、私たちのグループはなかなか内容が決まらなかった。初めは、聴覚障がい、視覚障がい、身体障がい、精神障がいと、障がいの方々と一緒に音楽を楽しむという内容で進めていた。先生からのご指摘もあり、内容を変更し、今回の創作絵本になった。
幼児教育学科の時の実習で、子どもたちが「介護士になりたい」という声を聴いたことがなかったことや、いろんな人にわかりやすく、介護の分野について興味を持ってもらおうと思い物語を考えた。介護保険について。まずは私たちが知る必要があった。幼児教育学科のころから遊びと表現の企画は難しいと感じていた。目的を決め、見ている人に何を伝えたいのか、どのようにすれば分かりやすく伝わるのか、伝える方法は何かなど様々なことを考えなければならず、大変だった。一から何かを作り出す難しさを経験することが出

来た。

絵本を創作する中で、私は、絵を描く担当だったが、物語の内容から絵を描き，表現することがこんなにも難しいとは思わなかった。一場面の文の量が多いことから、どのような表現をすれば見ている人に伝わるのか、伝えたいことは何か、と試行錯誤だった。講堂練習の時に先生に絵本を見せたとき、絵本の良さについて伝えられた。まず、絵本は開いてみるもの、「めくる」という動作が大切であり、絵本のミソであると学んだ。紙芝居とは異なり、絵と一緒に字があることも伝えられ、絵本を作ることにこんなにも段階や工夫があるのだと知ることが出来た。スクリーンへの映し方、絵本の作りかた、製本の仕方、絵本の見せ方、絵本の読み方など学びが多く、深めることが出来た。絵本の読み方を教えてもらう前と教えてもらったあとでは、自分でも驚くほど変わっていた。たった３０分もない指導の中で、読み方に感情が入っていなかった私が、周りの人が驚くほど良いほうへ変わっていた。「この先生は本当にすごい人だ」と改めて感じた。一文一文丁寧に、明るい場面なのか、悲しい場面なのか、物語を読む時には、表現豊かにすることが重要なのだと改めて学んだ。介護保険のこと、世代間交流の発表を通して、みんなで意見を出し合い、深めることでより良い物が生まれるのだと実感した。また、世代間交流を行うことで、幅広い年代の方の意見も取り入れることが出来るのだと学んだ。

発表会全体を通して、わざと大まかな内容で発表を構成することで、その人の個性を自由に表現できるのだなと学んだ。セリフや、立ち位置など全てが決まっている発表よりも、子ども土地の表現や個性を尊重することが出来ると知った。保育の現場での「発表会」は、保育者（大人）が時間を割いて作った大道具や、物語、セリフを発表する場ではなく、大人の発表ではなく、子ども達の成長や、個性を発表する場であるなと改めて学ぶことが出来た。保育者主体の保育、発表ではなく、子どもたちが主体となることが重要なのだと学んだ。(Y)